

第41回理事会開催

1985(昭和60)年度の決算報告の承認など

去る6月9日(月)、トヨタ財団第41回理事会が東京にて開催された。ここでは、先ず、昨年度の決算報告書と活動概要に基づき報告が行われ、審議の結果、原案どおり承認された。これに伴い、事務局では現在、年次報告書の作成に着手している。

また、フォーラム助成や民間助成活動促進プログラムの助成対象の決定、成果発表助成対象の報告、および評議員、選考委員(研究助成、活動記録助成、第3・4回研究コンクール、国際助成)の選任が行われた。更に、今年度の研究助成の応募状況に関する報告もなされた。

引き続き第11回評議員会も開催

理事会に続き、第11回評議員会がもたれた。ここでは、昨年度の事業内容についての報告とともに、本年度の事業計画についても報告が行われた他、理事・監事の選任が行われた。

研究助成などに800件を越える応募

研究助成および活動記録助成(昨年度までは研究助成特定課題)の一般公募については、本年4月1日より開始していたが、5月31日付けをもって締切った。

応募状況と本年度の助成予定は下表のとおりであるが、応募総数にして昨年度より100件以上も上回る結果となった。個人奨励研究(第I種)は13倍、予備的研究(第II種)は約17倍、総合研究(第III種)は2倍、また、活動記録助成については約4倍の倍率となっている。選考はこの7月から9月にかけて行われ、10月初旬には助成対象が決定される予定である。

1986年度研究助成等 申請実績と助成予定

件数	申請実績 助成予定	個人奨励研究 (第I種)	予備的研究 (第II種)	総合研究 (第III種)	研究助成計	活動記録
		325 25	423 25	30 15	778 65	41 10
金額 (万円)	申請実績 助成予定	6億 2,072 4,000	12億 7,895 6,000	3億 5,174 1億	22億 5,141 2億	7,785 2,000

おもな内容

- ◆民間助成財団の役割と課題…………… 2
- ◆「森林と環境」第22回研究報告会から…………… 3
- ◆日仏合同フォーラム開催…………… 4
- ◆“幕末佐賀を巡る”講演とシンポ開催…………… 5
- ◆国際助成紹介—インドネシア—…………… 6
- ◆インフォメーション・他…………… 7
- ◆新刊紹介、最近の報告書から・他…………… 8

第22回研究報告会開催

『森林と環境—新しい可能性の探求—』をテーマに、トヨタ財団第22回研究報告会が4月25日(金)、東京の“虎ノ門パストラル(東京農林年金会館)”にて開催された。

100名余りの出席者を迎え、林知己夫・放送大学教授の基調講演につづき、3つの助成対象チームによる4件の研究報告が行われたほか、これらの報告に関連しての総合討論が、沼田真・千葉大学名誉教授の司会のもとに展開された。(詳細については、P. 3参照)

研究報告を行う森田学・京都大学農学部教授





民間助成財団の役割と課題

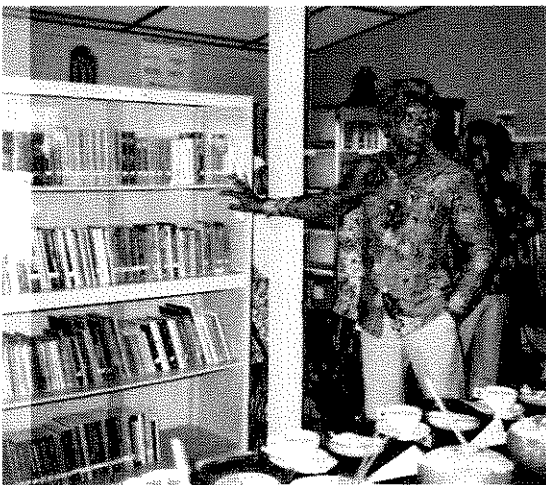
理事・事務局長 山口日出夫

● いっぱいある大きな役割

小さい粗末な本箱が、部屋の片隅に置かれてあった。「これは記念にとっておくつもりです。今ではお陰様でここまで本が揃いましたが、昔はこれに入るだけしかなかったのですから……」、マレーシア東海岸トレンガヌ州の小さな村・バトッラキットの図書館長は、歓迎会のあとでこう話してくれた。去る4月25日(金)——当地では、慣習により金曜日は休日となっている——図書館見学のために立寄ったわれわれ一行を、ここでは大人も子供も賑かに迎えてくれた。大人達は伝統的な勇壮な踊りを、また子供達は、図書館で読んだ民話の暗誦を披露してくれた。海岸につくられた会場はかなりの暑さにもかかわらず、子供達は大勢の人々の見守るなかで汗をかきかき熱演してくれた。そして、地元有力者の話が延々と続く。何か立派な建物を造りたいと言っている様子であった。

これは、当財団が設立10周年記念特別助成で行った「マレーシア図書館パイロット・プロジェクト」のフォローとして農村部図書館を訪ねた時の一コマである。

バトッラキットの図書館にて説明するノア氏



同行して頂いたノア・アザム氏(マレーシア読書促進委員会委員長、首相政治補佐官)は、現地の人にこんな話をしていた。「昔、われわれの祖先は、大変貧しい時代に子供達の教育のため学校をつくった。ところが、現在は比較にならぬほど裕福になっているのに自助努力が足りない。もっと読書推進のための活動を充実してほしい」と。

今回の現地視察では、4州の農村部図書館を訪れたが、活動の進行状況は様々であった。建物は立派でも活発な活動内容とは言いがたい図書館もあった。リーダーの指導力にかなり左右されるものと実感した。財団の助成は、1か所200万円足らず。日本国内の図書館などで使われる金額からすれば問題にならないほど小額かも知れないが、それぞれの地域の人達には喜んで頂いてるようであった。何よりも子供達が本をむさぼるように読んでいるのを見た時は、正直のところ嬉しかった。反面、財団による助成が呼び水となり、地元からの図書や寄贈が増えるのではないかという期待は、さほど実現されていなかった。

いずれにしても、このプロジェクトに係わったことにより、マレーシアでは独立以来、日も浅いこともあり、マレー語の本が意外に少ないことも教えられ、若いマレーシアの国のもつ困難さの一面を垣間見ることが出来たと思っている。

以上を例として、国際助成を行っている、限られた範囲ではあるが、各プロジェクトを通して相手国の現地との係わり合いが深くなり、次第に東南アジア各地への関心も高まってくる。言ってみれば、国際理解が知らず知らずのうちに深まってくるということになる。現在、わが国は、社会の各方面において早急な国際化を迫られているが、この点においても民間財団の助成活動は大切な役割を果たしていると言えよう。また、国際化の面に限らず、わが国では、解決を要する諸問題が山積しているが、ここでも民間財団の貢献は大きなものがある。

● 助成財団資料センターへの期待

昨今、助成財団を含めて、公益法人に対する課税強化が検討されていると伝え聞く。私達財団関係者は、この種の検討が、財団の実情やその果している役割を充分理解したうえでのことであろうかと疑念をもっている。しかし一方では、個々の財団活動あるいは財団の全体像について、これまで社会に知ってもらふ努力を充分に行ってきたかと言うと、決してそうではなかったという反省もある。

昨年11月、財団有志の協力で発足した助成財団資料センターは、この面で情報提供の役割を果たしてくれるであろう。6月30日現在76団体が加入し、100を越える団体からの資料が集まっており、今後一層の充実が期待される。しかし、財団およびその活動を良く理解してもらうためには、沢山の財団が日本に生まれる必要がある。第3セクターという言葉は、国際的には民間非営利活動セクターを指すが、今のわが国では、これは官民共同出资方式による法人を意味する。事程左様に民間非営利活動はママ子扱いとなってしまうている。財団活動がもっと盛んになるためには、もっと多くの個人や企業などの積極的な参加が望まれるが、財団が何を指し、何を実行出来るのかが不透明では参加を期待する方が無理と言うものであろう。そのための情報提供者としての同センターの持つ役割は大きい。また、ここにおける財団間の情報交流は、財団活動にとって質的な向上に繋るものと考えられる。これにより、この種の活動がより魅力的になれば、社会的な共感や理解も得られ易くなり、ひいては新しく財団活動へ参加しようとする人々の強いインセンティブとなろう。

財団の活動内容が、今よりも更に充実するようになれば、課税の強化などということは、話題にさえなくなるかも知れない。そして、充実した活動内容に溢れた沢山の財団が設立され、もっと多くのことに貢献できる日がやってくることを願って止まない次第である。



第22回研究報告会から

森林と環境……新しい可能性の探求……

本誌P. 1で紹介したように、去る4月25日(金)、東京にて標記テーマの研究報告会が開かれた。以下に、その概略をお伝えしよう。なお、当日配布資料に若干の余部があります。ご希望の方は、郵送料として240円切手を同封の上、研究報告会係宛てお申し込みを。

① 基調講演

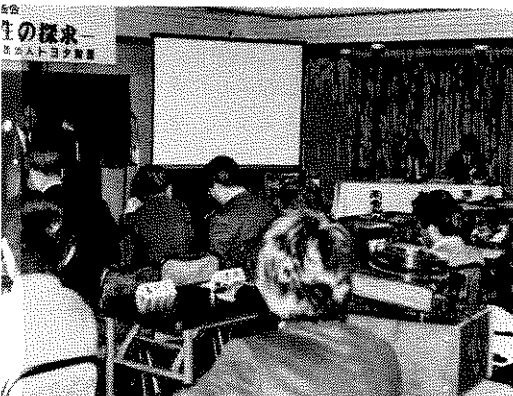
まず冒頭に、放送大学教授の林知己夫氏から「文化と森林」と題する基調講演が行われた。林氏は、この3月まで国立統計数理研究所にあって、社会の多分野の現象を定量的に把握する方法を開発してきた。森林に対する意識の国際比較やニホンカモシカの生息数の推計手法にも取り組んできた。この日の講演は、このような実績を踏まえたもので、科学的なものの扱えかたを追及してやまない同氏の姿勢がよくにじみ出ていた。氏の方法上の厳密さには定評があるが、それだけに「科学的に理解できることには限界があり、そこに人間の判断の重要さがある」という指摘には説得力があった。

② 研究報告Ⅰ（日本の場合）

続く研究報告では、わが国の森林を対象とした2つの研究が発表された。

最初は、ヒノキの美林として知られる旧木曾御料林の森林経営を、江戸時代が

研究報告を行う南雲氏



ら現代に至るまでの数百年というスパンで分析したものである。発表は、南雲秀次郎（東京大学農学部）・末田達彦（名古屋大学農学部）・原田文夫（元長野営林局）の三氏によってなされた。「木材生産の保続」と「環境保全」を図るためには、たゆまざる適切な施策が必要である。そのためには、長期的な視野にたった構想力が要求されることを痛感した。

2番目の報告は、焼畑林業に関する研究で、第2部の研究と深い関係にある。北村昌美氏（山形大学農学部）からは、タイとインドネシアの研究者も交えて実施された新潟県山北町の焼畑林業の実態調査について報告があり、村尾行一氏（東京大学農学部）からは、焼畑林業をさらに複合化したグリーン・コンビナートの構想について報告があった。農業にしても林業にしても、近代化とともに単作化が進んだわけであるが、もう一度かつての複合的な生産方式を見直す必要があるのではないか、というのが両氏の報告の基調であろう。

③ 研究報告Ⅱ（東南アジアの場合）

午後の研究報告では、まず森田学・渡辺弘之（ともに京都大学農学部）の両氏から、インドネシアとタイにおけるタウンヤ型アグロフォレストリーの実態やその社会的な立地構造、現状の問題点についての分析が報告された。昨年夏に現地の研究者と共同して実施された調査の結果である。アグロフォレストリーというのは、農・林が複合した生産システムのことで、日本の焼畑林業もその一形態ということになる。タウンヤ型というのは、オランダ植民地政府によって導入されたチーク造林と同型のものを言う。東南アジアの森林破壊を防ぐ方法として、この生産方式を再評価し、現代に適した方式を確立しようというのが、森田氏等の研究意図である。

この報告に続き、低地林——特にサゴヤシ林の生態系を生かした地域振興の試みについて、高谷好一（京都大学東南ア

ジア研究センター）・遅沢克也（同大学院）の両氏から発表があった。遅沢氏は、2年間にわたりインドネシアのスラウェシ島にあるサゴ村落に入り込み、村人たちと一緒に、高品位のサゴテンブンの生産性向上に取り組んでいる。この実践はさらに継続することになっており、今回はその中間報告ということである。サゴの群生する低湿地帯では水田開発が進みつつあるが、なんとかサゴ林を保存しながら水田と同じ程度の生産性をあげられないかというのが高谷氏らの研究のねらいである。

④ 総合討論

以上の基調講演と研究報告を受け、最後に2時間にわたり、「森林・環境・生産」をめぐる総合討論が行われた。司会は、植物生態学者の沼田真氏、パネラーには、富山県で草刈十字軍の活動をしている足立原貫氏（富山県立技術短期大学）、森林に対する意識の国際比較研究を推進してきた石田正次氏（国立統計数理研究所）、東南アジアの焼畑研究を続けてきた久馬一剛氏（京都大学農学部）、早くからアグロフォレストリーに着目し研究してきた熊崎実氏（林野庁林業試験場）である。

それぞれの体験や実績を踏まえて、各研究報告に対する意見が述べられ、それに対して各研究者からの応答がなされた。また、フロアとのやりとりも活発に行われた。最後に、司会の沼田氏より、「農・林のみならず、生態系を全体として『保続』していくという考え方の重要性」について発言があり、閉会となった。



今回の研究報告はいずれも、近代的な生産性向上の過程で見失いがちであった伝統的あるいは在来型の生産方式に着目し、そこから環境と生産のバランスを回復するための新しい可能性を探求しようとしたところに特色がある。これらの研究がさらに深められ、具体的な施策へと結びついていくことを期待したい。

（山岡記）



※フランスから3人の参加者

「文化としての先端技術を考える会」では、一昨年の秋からおよそ一年余りにわたって続けてきた討論の成果がまとまり出版されたのを機会に、フランス大使館の協力と財団の成果発表助成を得て3人のフランス人参加者を交え、4月4日、東京にて日仏合同のフォーラムを行った。

フランス側参加者は、工業省の科学技術予測評価センター所長のティエリー・ゴードン氏、パリ・ドフィヌ大学教授でポリテクニクでも経済を教えているマルク・ギョーム氏、それにプロバンス大学教授で歴史学者のフィリップ・ジュタール氏の3人で、いずれも40才代の第一線で活躍している人々である。

一方日本側参加者は、「文化としての先端技術を考える会」のメンバーを中心とし、フランス政府技術留学生OBの会（通称SABTECH）の有志がこれに加わった。総勢40名程のコンパクトなフォーラムであった。

この種の国際フォーラムはとかく形式に流されがちであり、実質的な討議にならない事が多いので、企画に当たってはその点を最も注意した。

※示唆に富んだプレゼンテーション

まず、問題意識が常に具体的な現実との接点を持てるように、これからの文化と極めて密接な関係を持つことが予想される先端技術の例として、前日にNHKでハイビジョンの見学をし、その後この開発責任者の和久井孝太郎氏を囲んで意見交換を行った。これはフランス側の3人にとって非常に強い印象を与えたと思

え、教育面への応用などを中心に活発な討論が交された。

4日のフォーラムは、東京・六本木の国際文化会館で、午前9時から午後5時までの集中的な討論であった。まず、在日フランス大使、工業技術院長などの挨拶のあと、午前中は樺山紘一氏とフランス側3人のプレゼンテーションが行われた。

樺山氏は「先端技術の歴史的意義」というテーマで、現代の状況の下で技術の問題を文化の局面から把握する事の重要性を指摘し、世界中には様々な文化があるように複数の技術システムがあり、異なる文化や技術の伝統に対する理解が必要であると強調した。

ゴードン氏は、彼の科学技術予測評価センターが最近行った「技術の現象報告」という調査研究をもとに、技術システムと社会との関係を論じた。それによると、社会には免疫作用にも似た一種の自己安定化機能があり、かなり大きな個別技術の発展があっても、システム全体としては長期にわたって安定なことが多いが、技術システムが変化する場合には、一つの共通の形をとるといふ。すなわち、まず知識の伝達経路が変わり、暫くして、物質、エネルギー、生物、時間の変化が起る。このことを、歴史的な様々な具体例で示した。

ギョーム氏は、今日の経済発展と文化の発展が、とりわけ第2次世界大戦後大きく乖離してしまった現実の分析から出発し、今や大量生産、大量消費のモデルに終止符を打つべき時であるとした。特に現代の量産品が美術の分野に刺激を与えられないのは、デザインだけの問題で

はなく、製品の着想や製造過程、さらには仕事への態度の中に、芸術家が考え、作品の中に表現している神話的なものや象徴的なものが欠如しているためであるという指摘は示唆に富んでいた。

ジュタール氏は、回教徒の移民労働者の中でカセットテープに吹込まれた説教が普及し、ために回教世界全体の伝統が強化された例などをもとに、新技術が新文化を作るのではなく、新技術は既存の文化の中心的核や精神的表現、創造力、象徴的なシステムなどを構成するものの伝達を容易にするに過ぎないとし、新技術は世界を単純化し、均一化するどころか、かえって複雑化し、多様化させていくことになると主張した。

午後は、こうした午前中のプレゼンテーションを受け、林雄二郎氏とモーリス・ブレン氏の司会で全体討議を行った。その内容については、プレゼンテーションの詳細とともに、いずれ記録にまとめNHKブックスの一冊として出版する予定である。

また翌5日は、エクスカージョンとして筑波の機械技術研究所と電子技術総合研究所を訪ね、ロボットと超伝導によるエネルギー貯蔵を見学の後、筑波の研究者達との交流を行った。

※印象的だった「問題意識の共通性」

今回の日仏合同フォーラムを終えて、全体としての強い印象は、問題意識の共通性ということである。かつて私は、「文化としての先端技術」（日本放送出版協会刊）の序文に、先端技術の開発に携わっている最先端技術者の問題意識には共通性があると書いた。しかし今回は、こうした文化と技術の間の問題を、フランスと日本という、文化的にも技術の発想にも大きく隔りのある人々が、果して共通の言葉で話し合えるものかどうか、かなりの不安があった。ところが結果的には、殆ど国民性の違いを意識する事もなく話し合えたのは逆の意味で一つの驚きであった。



“幕末佐賀を探る”——講演とシンポジウム開催——

洋学史研究会・幹事 道家達将

◆はじめに

去る4月5日、私達「洋学史研究会」は佐賀大学経済学部において、標記をテーマに講演（研究発表）とシンポジウムを主催した。本会は、財団の助成を受け、幕末西南諸藩の洋学史を研究してきた杉本勲（元九州大学文学部教授）を代表とする研究グループである*。佐賀在住の研究者も参加し、次のようなテーマと演者によって行われた。

・一般講演：①佐賀藩の洋書目録（斎藤信）、②長崎海軍伝習所の研究（羽場俊秀）、③佐賀藩軍事資料（酒井泰治）、④近代製鉄技術史と佐賀・鹿児島藩（飯田賢一）、⑤幕末の和算と測量—富山の石黒家の研究（楠瀬勝）、⑥英（学）学校致遠館について（岩松要輔）、⑦幕末の医学における佐賀藩（酒井シツ）

・特別講演：①佐賀藩の財政（長野暹）、②佐賀藩の洋学（杉本勲）

・シンポ：『幕末洋学における佐賀藩の位置』（司会：中山茂；池田史郎、菊池俊彦、小宮睦之、長野暹、杉本勲）

なお、会を催すに当たっては、蘭学資料研究会、日蘭学会、日本医史学会、日本英学史学会、鍋島報効会、佐賀市、佐賀新聞社、およびトヨタ財団の後援を受けた。

◆佐賀新聞のもった疑問

会に先立ち、佐賀新聞は特集記事を組むなどして市民向けに積極的にアピールしてくれた。当日の朝刊「有明抄」欄では、大略次のように記されていた。

「新しく発見された史料に基づいて、特に佐賀の『外国学』の根源と発達、その影響などについて、専門家が一堂に会する。……幕末佐賀について、不思議に思えてならないことがある。その一つは、どこにそんなお金があったのかということだ。当時の佐賀の史書、例えば藩主の

『鍋島直正公伝』などを読めば、その頃の佐賀藩がどれ程財政難だったか、延々と書いてある。赤札事件とか『加地子ばったり』とか。火の車の台所だったくせに学校（弘道館）の予算は一挙に10倍に増やす、大砲や軍艦はどんどん買ったり造ったり、反射炉を建設したり、通信器材を研究したり試作したり。ものすごいお金がいったはずだ。そのお金はどこからひねり出されたのか。不思議の二つ目は、直正が当時どうして外国の文明・文化・科学の発達の知識や情報を得ることが出来たのか。三つ目の疑問は、鍋島藩の科学技術レベルが国際的に見てどの程度のもだったのか。……言わば当時のハイテクノロジーが佐賀に集中したと言っているのか。その科学技術が明治以降の日本の近代化にどんな役割を果たしたのか。今日の講演とシンポが、長年のこんな疑問に答えを出してくれるだろう。」

参加者は130人を越え、その半数以上が市民であった。

◆高かった洋学の水準

結論から先に言えば、上記の疑問を始めとする多くの問題に確たる解答を与えることは出来なかったものの、究明の努力は着実に一歩深められたと言える。

財政面については、石炭とか、ろうなどの特産物で利益を得たとか、物々交換によって必要な諸物品を入手したのではないか、陶磁器などの密貿易をしていたのではないかと（証拠はない）とか、懸硯方（かけすずりかた）という藩主の私費を賄う特別の財政によって運営したとか、或いは苦しい苦しいと言って幕府に納めるべき金をまけてもらったとか、などの議論が例を挙げて活発に交された。借金証文を証拠に、やはり藩財政は苦しかったとする意見もあった。

技術面については、他の藩および江戸

幕府と違って、実地の訓練を受けた人材が多数生み出されたこと、それも、武士の身分のない農民や職人でも高い技能をもった人間は、武士とともに精錬所や火術方に雇われて働き、柔軟な研究・製造組織を作り上げることが出来たこと、またそれによって、旧来の土着技術と新技術を統合して使うことも出来たこと、上級・下級武士がともに洋学者について洋学を学び、藩主を先頭に自前で多数の洋学者を育てたこと、この様な人材養成には、長崎海軍伝習所や英学校致遠館も大きな役割を果たしたことが議論された。

人材は、従って多教育者、明治維新以降も多数の人々が活躍した。「鹿児島の海軍」「長州の陸軍」に対し、「佐賀の文部省」と言って良い程多くの教育者を出したとの意見もあった。

洋学の知識は、単なる翻訳に止まらず、実際に実行してみることで、実際の洋学が進んだが、必要な物品・材料等は、自前および物々交換により入手していた。

洋学の必要となるそのきっかけは、1808年のフェートン号事件など長崎港等への外国軍艦の侵入などにより、これを防ぐための軍事目的に端を発してはいるものの、多数の上・下級武士、職人、医師らが洋学の素養を身につけることが出来たことにより、洋学の水準が高まり、医学のほか、語学、算術（数学）、窮理（物理学）、舎密（化学）などの記述と実験的研究が行われ、自然科学の体系化が進んだ。また、自然科学だけでなく、技術や社会に関する洋学の研究も行われ、藩の上層部は、自前で（幕府の手を借りずとも）科学技術情報や外国の情勢を知ることが出来た。長崎警備の役目を負わされていたことも、これらのプラス要因となっていた。

最後に、多数の史料が最近になって整理・公開されつつあることにより、今後急速に、佐賀の洋学の実態が明らかにされていくであろうということが指摘され、閉会となった。

(*)助成成果の報告書についてはP.8参照



国際助成紹介 —インドネシア—

国際助成部門 牧田 東一

インドネシアへの助成の特徴

国際助成の統一テーマに当たるものは、東南アジア各地の固有文化の保存と振興であるが、各国の実情を反映してそれぞれに特徴がある。フィリピンは、前号でも紹介した様に、地方史の研究がその特徴になっているが、インドネシアの場合は、これがまた異なっている。

第1の特徴は、インドネシアの文化の多様性に配慮し、地方大学重視の視点からも、なるべく多くの地方の文化・歴史等の研究に同時並行的に助成を行っている点である。1984年度、85年度の助成対象研究をみると、西からアチェ、メダン、パダン、リアウ、ジョクジャ、バンジャルマシン、ウジュンパンダン、アンボンといった地方都市の大学の研究者や郷土史家に助成を行っており、研究内容も地元の地方文化・歴史に関するものである。

次に、固有文化に関連のある分野であれば、比較的広い範囲の研究を対象としており、また研究期間も1年ないし2年といった短期の個人研究が主であることである。これは、インドネシアにおける国際助成活動が試行的・実験的なものとして、間口を広くとりながらも一方では、リスクを低くするために、小規模の研究を重視してきたという財団側の事情による。さらに、地元で在住するこの分野の研究者が絶対数として少ないために、一つの明確な分野やテーマで絞ることが難しいというインドネシア側の事情もある。

3つ目の特徴としては、固有文化の保存と振興というテーマを広く解釈して、伝統社会や伝統文化が近代化（工業化や都市化など）によって、どのように変化しつつあるのかという言わば今日的テーマも一部含んでいる点があげられる。

これまでに完了した4つの研究プロジェクトについて、その概要を以下に紹

介しよう。

なお、報告書閲覧のご希望など関心おありの方は、電話にて国際助成部門までお問合せを。

①ハジ・ハッサン・ムスタバのアンソロジー (アイップ・ロシディ：作家)

ハッサンは、西ジャワ出身のイスラム思想家であるが、スダ語で書かれた多くの韻文、散文を残している。助成対象者のアイップ氏自身西ジャワ出身の作家であり、このハッサンを同地域におけるスダ語文学の先駆者の一人として位置づけている。そこで、ヨーロッパ、中東、インドネシア国内に散在するハッサンの著作を集め、またメッカで教鞭を取ったハッサンの足跡を追い、オランダ、メッカ、カイロなどを訪ね歩き資料の収集にあたった。これにより、ハッサンの作品に関するコレクションを作ると同時に、それを文学評論や文学史研究として報告書にまとめている。この報告書は、ハッサンの作品はもちろん全文がスダ語で書かれている。

②リアウ州古文書の日録づくり

(U. U. ハミディ：リアウ大学)

リアウ州は、スマトラ島の中央部に位置し、ちょうどシンガポールの対岸にあたる地域である。したがって、マレー半島部と一つの文化・経済圏にあり、ジョホール（マレーシア）などとの関係が深く、マレー文化揺籃の地の一つである。

このプロジェクトでは、リアウ州に残されている古文書を調査して目録化し、そのうちの重要なものをアラビア文字からローマ字に翻訳し、収録している。

報告書によると、この調査の対象となったのは、137点の文書で、19世紀から今世紀初頭にかけてのものばかりである。執筆者は全部で70人、うちリアウ出身者が37人おり、中には4人の女性がいる。内容的に分類すると、イスラム教関係43点、学術（歴史、法律、慣習等）が48点、言語（マレー語に関するもの）8点、文

学作品（詩、物語）33点、伝統医薬が5点となっている。また、6点の翻訳されたテキストが収められている。

③バタラ・ゴワ：マカッサル地域の社会運動におけるメシアニズム (ムフリス：ハサヌディン大学)

スラウェシ島南部を本拠地としたブギス・マカッサル族は、13～14世紀にかけ、周辺の海域を広くその勢力下とする海洋国家をつくりあげた。マカッサル族のゴワ王国は、港町マカッサル（現在のウジュンパンダン）を中心として隆盛をきわめたが、17世紀以降オランダとの覇権争いに破れ、次第に植民地体制下に組み込まれていった。

当時の植民地政府の資料には、ゴワ王国を再興する英雄（バタラ・ゴワ）が現れて、人々の窮状を救うというメシアニズム（救世主信仰）が農民の間で度々起こり、それらが暴動や騒乱に結びついていたことが記されている。

本プロジェクトは、この社会運動の歴史を、植民地支配下の民衆運動の観点から研究したものである。この運動は、インドネシア独立へ至る民衆の闘いの前史と位置づけられているが、一方、報告書によれば、その背後には、オランダの植民地支配を脅かそうとするイギリスの干渉が見え隠れするという。本研究は、ジャワ島におけるラトゥ・アディル運動との対比が可能であろう。〔次頁へ続く〕

今も残るバタラ・ゴワ信仰：信者の集り





④スダ語文献のインヴェントリー および記録の作成 (エディ・エカジャ ティ：パジャジャラン大学)

これは、スダ語およびジャワ語などで書かれたスダ地方の古文書の総合目録づくりである。従来、ジャワ文献学に比べ、スダ古文書に関する研究が手薄であったが、このプロジェクトにより、相当包括的な目録が完成する運びとなった。ここに収められているのは、ジャカルタ、スメダン、クニガンそれぞれの博物館のスダ語文献コレクションと、オランダ、英国、スウェーデンにあるコレクションおよび、スダ地方の各地における個人所有の古文書である。

以上の他に、現在10件のプロジェクトが進行中であるが、これらについては、報告書がまとまった時点で改めて紹介したい。

中間報告会開催

昨年度の研究助成につき、予備研究(第II種)と個人奨励研究(第I種)に関する中間報告会が、それぞれ5月7・8日(水・木)および同23日(金)に東京・六本木の国際文化会館にて行われた。

予備研究に関する報告会では、様々な分野に関連する27件の研究報告が行われた。また、個人奨励研究に関する報告会では、10件の研究発表があった。

一方、5月15日(木)には、同会館にて、昨年度の研究助成・特定課題(市民活動の記録の作成)に関する中間報告会が開かれ、10のグループから、各々の活動概要および記録作成の進行状況について報告が行われた。

“第2回研究コンクール”

報告書まとまる

昭和56年10月にスタートした第2回研究コンクールの全体像(研究奨励賞候補→研究奨励賞→特別賞)をまとめたのが本書である。入手ご希望の方は、封書にて240円切手を同封のうえ、研究コンクール係宛てお申し込みを。

助成財団資料センターより 季刊広報誌『助成財団』創刊!

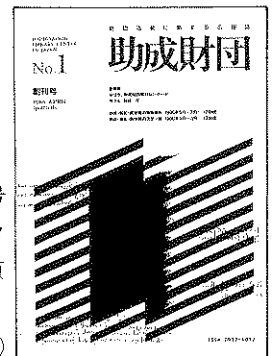
日本の財団関係者により、昨年11月「助成財団資料センター」が設立されたことは、本誌34号にて紹介したが、この程同センターから、財団活動に関する情報誌として『助成財団』が創刊された。

主な内容は、以下の通り。

- ・巻頭言 理事長 林雄二郎
- ・レポート：「センター設立の経緯と趣旨および事業概要について」
雨宮孝子、山岡義典
- ・助成・奨学・表彰募集案内
〔1986年5月ー7月〕 17財団
- ・助成・奨学・表彰決定一覧
〔1986年1月ー3月〕 13財団
- ・文献・資料紹介

これを見ても分かるように、各財団の募集案内と決定一覧が内容の中心となっている。

『助成財団』創刊号
助成財団資料センター発行、B5、66頁
送料：1部につき
200円(切手申込み)



助成を受けたい方々にとって、最新の募集情報をまとめて見ることが出来るのは、大変便利であろう。決定一覧もまとめて見ると、助成テーマ全体の傾向や、個々の財団の助成プログラムの特徴などいろいろなことが見えてくる。

入手ご希望の方は、送料分の切手(1号につき200円、本年度は4号まで)を同封のうえ、下記宛てお申し込みを。

(本レポートで知った旨を併記のこと)

東京都新宿区新宿2-1-14
エレメンツ新宿ビル3F(〒160)
助成財団資料センター ☎03-350-1857

本とビデオになった“ことばあそび”

——ことばがうまれる あたしのあ あなたのあ——

詩人の谷川俊太郎氏を代表とする「ことばあそびの会」は、当財団の研究助成(1982・83年度)を受け、ことばあそびの応用による障害児の言語指導に関する実践的な研究を行ってきた。

その成果については、トヨタ財団第21回研究報告会「ことばを求めて—障害児とコミュニケーション—」でも報告が行われた。(前号にて紹介)

谷川氏の詩をベースに演じる、共同研究者・波瀬満子さんの“ことばあそび”を見ていると、障害児のみならず、大人までもがことばの魅力の虜となる。

そんな不思議な力をもつ“ことばあそび”が、最近各方面で注目されている。

この度、発売されることになった、本とビデオには、この“ことばあそび”を

より多くの人に知って、試して、批評してもらいたいとする彼等の願いがこめられている。

これらは、①幼児向けの絵本(定価：1,600円)、②障害児の言語指導に果す意味と役割を語った単行本(2,500円)、③このあそびの実際をビジュアル化したビデオ(インストラクション編、ドキュメント編 各33,000円)の3点セットからなっている。(いずれも太郎次郎社刊)

どれをとっても、大人と子どもが、共に楽しく遊べるよう工夫されており、障害をもつ多くの子供たちのことばの指導に役立つことであろう。

(問合せは、「ことばあそびの会」

☎：03-320-8217)



新刊紹介

『生活学の方法』

中鉢正美・編著

ドメス出版・刊

A 5判 334頁 3,800円

本書の「はじめに」で編者も指摘しているように、「これからの生活研究や社会研究には、アナログ的研究方法の拡大が期待される」のであるが、そのような研究はまだ試行段階にあって方法としては確立していない。

トヨタ財団では、これまでもそのような新しい方法を模索するような生活研究にいくつか助成を行ってきたので、これらをもう少し幅広い視点から再吟味してみようということになり、1982年の秋に「生活研究フォーラム」がスタートした。以後2年間、1月おきに事例検討会がもたれたが、その成果をまとめたのが本書である。

全体の構成は、食生活研究の方法、住まい研究の方法、道具・商品研究の方法、参与観察の方法、生活意識・価値観研究の方法、生活構造論へのアプローチ、から成っており、何らかの結論や評価をまとめたというよりは、新しい研究方法探求の事例集という性格が強い。

『INCIDENT REPORTING SYSTEM についての試行的研究』（「航空法務研究」16、17）

宮城雅子・編著

有斐閣・刊

A 5判 190頁 4,650円

1件の大事故発生の背景には、29件の小事故と300件の小さなトラブルや不具合があると言われている。この事故に至る前のトラブルや不具合のことをIncidentと呼ぶが、航空輸送の安全確保のためにはこのIncidentの実態をあきらかにすることが重要である。しかし種々の理由から、わが国ではその情報を登録する仕

組み（Incident Reporting System = IRS）が出来ていない。

そこで、このような制度の実現を目指し、試行的に実施したのが今回の調査である。航空輸送会社5社の2,500人にのぼる機長や副操縦士等を対象にアンケートを行い、26.6%の回収率を得た。その分析結果をまとめたのが本書である。自由記述式で記入された様々なIncidentが、特に人的要因という観点から詳細に分析されている。予備研究段階の成果ではあるが、示唆に富む内容となっている。

最近の報告書から

当財団の助成研究から、「成果発表助成」によって印刷された報告書を紹介いたします。入手ご希望の方は、送料分の切手を同封の上、財団レポート係宛てお申し込み下さい。なお、品切れの際はご容赦願います。

III-024 西南諸藩の洋学——佐賀・鹿児島・萩藩を中心に——

（杉本勲・他、B-5 和文 455頁 送料 300円）

本報告書は、代表者以下21名の研究者からなる「西南諸藩洋学史研究会」が昭和56、57年度の助成により実施した、標題に関する史料調査の成果。主な内容は、史料目録および部門別史料の解説である。新史料の発掘に伴い、幕末諸藩の学問・技術水準が実証的に明らかになりつつあるが、これらの知見は、日本の近代化の出発点を明治維新よりさらに前の時代に求めるべきであろうということを示唆するものと思われる。（P.5 関連記事）

I-015 日本における灌漑に関する和英用語集・附図表（ギル・ラッツ

B-5 和英文 85頁 送料 240円）

日本の農業水利組織や農業水利政策についての用語を、現地調査に基づいて図

解も含めて英文で解説したものの、G. ラッツ氏は、助成当時日本の大学院に留学中であったが、現在は、ポートランド州立大学助教授。日本の農村社会や農業政策への関心が海外で高まっているが、その根幹をなす灌漑について理解する際の好書となろう。5年がかりの力作である。

I-018 中小地方都市における高齢者の運転特性と交通計画上の課題

（高齢化社会に向けての交通問題研究会・編著 B-5 和文 277頁 送料 300円）

A編、B編、C編と資料編から構成される。A編は豊田市を対象に、高齢者の交通に関する意識調査、パーソントリップ分析、交通事故統計の原票調査、アクセレーション・ノイズによる高齢者の運転特性分析の報告である。B編は松山市を対象に、別の観点・方法によって高齢運転者の一般交通特性、事故特性、運転特性を分析したものである。これらを受け、C編では、交通計画上の今後の課題をまとめている。将来の高齢運転者の増加は必至と考えられるが、その対策を検討するための重要な基礎資料となろう。

編集後記

◆加藤先生、道家先生、ご多忙の中ご寄稿有りがとうございました。両方とも大変有意義な会だった様に思います。

◆昨年を100件以上も上回る研究助成の申請の山。受付業務が一段落し、ホット一息と思いきや、迫り来る選考委員会の準備等々。夏バテを心配しつつも、落度がないようにと気を引締めている毎日。

◆最近“いじめ”が社会問題となっているが、一部の問題ある公益法人を取り上げ、地道に誠実な活動をしている他の多くの同種法人全体に課税を強化しようとする動きも一種の“いじめ”では？

トヨタ財団レポート No.37

このレポートを継続してご希望の方は、お葉書にて財団宛てお申し込みください。

発行日 1986年 7月25日

発行所 財団法人 トヨタ財団

発行人 山口日出夫

編集人 渡辺 元

印刷 真友工業株式会社